2025（令和 7）年度

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化学科

「海外フィールドワーク A（バングラデシュ）」

実習報告書

2025（令和 7）年度

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化学科

「海外フィールドワーク A（バングラデシュ）」

実習報告書

目次

はじめに 2

授業スケジュール 7

共同研究報告書

「バングラデシュ農村部の飲料水問題と給水施設の維持管理―管理組合による持続可能な運営体制の検討―」..... 8

個人報告書 18

長谷部愛「フィールドワークから考える地域課題―バングラデシュでの調査を通して―」 18

松田咲優「バングラデシュ研修から得た学び」..... 21

森川結子「共に考える援助のあり方 ―バングラデシュの現地から見えた援助の実態と課題―」 24

石川陽葉莉「紅茶と親しみの文化 ―バングラデシュと日本の比較考察―」..... 27

岩井佑季「バングラデシュの生活環境から考える「豊かさ」の定義」..... 30

次回参加者へのアドバイス..... 34

ある調査村の様子

はじめに

本報告書は、2025 年度に開講された名古屋市立大学人文社会学部「海外フィールドワーク A」の成果報告書である。

1. 研修概要

今年度は、飲料水問題が深刻なバングラデシュ南西部のジョソール県を夏季休暇中に訪問し、現地 NGO の協力を得ながら、飲料水問題やその解決のために取り組まれている開発援助に関する聞き取り調査を含むフィールドワークを実施した。これにより、地域住民の生活、開発援助や NGO 活動の実施状況、地球温暖化を含む自然環境の変化などについて把握するとともに、異なる生活や文化、その国や地域が抱える社会課題について体験を通じて学ぶことを目的とした。なお、渡航前には輪読を含む事前学習を行い、飲料水問題を中心としたバングラデシュの現状や言語などについての理解を深めた。また、帰国後には事後学習を行い、本報告書を作成した。

参加者の募集に関しては、2025 年 4 月に 1 年生全員を対象とした説明会を開催するとともに、学務情報システムを用いて人文社会学部の全学生に対しても本研修に関する情報を共有した。その後に事前説明会を 2 度開催し、合計 13 名の参加があった。その中から、最終的に参加が確定したのは 5 名であり、その内訳は、国際文化学科 1 年生（2 名）、国際文化学科 2 年生（2 名）、現代社会学科 3 年生（1 名）であった。参加者の中には、海外渡航経験がある学生がいた一方で、初めての海外渡航という学生もいた。また、参加者全員がバングラデシュを含む南アジアへの渡航は初めてであった。

参加者の確定後は事前学習を行い、夏季休暇中（8 月 20 日～8 月 30 日）にバングラデシュでのフィールドワークに臨んだ。バングラデシュ滞在中は、慣れない環境や香辛料の効いた食事が続くことで疲れを見せる場面があったものの、大病や事故もなく無事に渡航を終えることができた。フィールドワークでは、英語－ベンガル語通訳を用いて積極的に聞き取りを行い、メモを取る学生の姿が見られた。また、フィールドワーク後には、教員からの指示がなくとも学生が自主的に集まり、調査データをまとめていた。聞き慣れない専門用語や外国語が飛び交い、生活においても慣れない環境が続く中でも、必死になって泥臭く調査を行う学生の姿を見ることができたのは、フィールドワーク冥利に尽きると思う。この経験が参加者の今後の大学での学びや、長い人生のどこかで活きることを切に願う。

授業風景

2. フィールドワークの実施場所

(1) ジョソール県

本研修では、飲料水問題が深刻なバングラデシュ南西部のジョソール県を2025年8月22日～29日の日程で訪問した（図1）。バングラデシュが位置する南アジアは、飲料水問題が最も深刻な地域のひとつとされる（United Nations 2019）。バングラデシュの水環境は地域により多様性があるが、一般的には地下水砒素汚染、沿岸部の塩害、表流水汚染など飲料水問題が深刻である（United Nations Children's Fund, Bangladesh 2021）。このため、バングラデシュでは、2019年時点で人口の約43%しか安全な飲料水へのアクセスを有していない（United Nations Children's Fund, Bangladesh 2021）。また、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SGDs）の飲料水に関する目標6のモニタリングを行う組織によると、バングラデシュで安全に管理された飲み水を利用可能な人口は、2022年時点で59%となっている（United Nations Children's Fund and World Health Organization 2023）。特に、本研修で訪問したジョソール県は、バングラデシュの中でも、地下水砒素汚染問題が最も深刻な地域のひとつである。

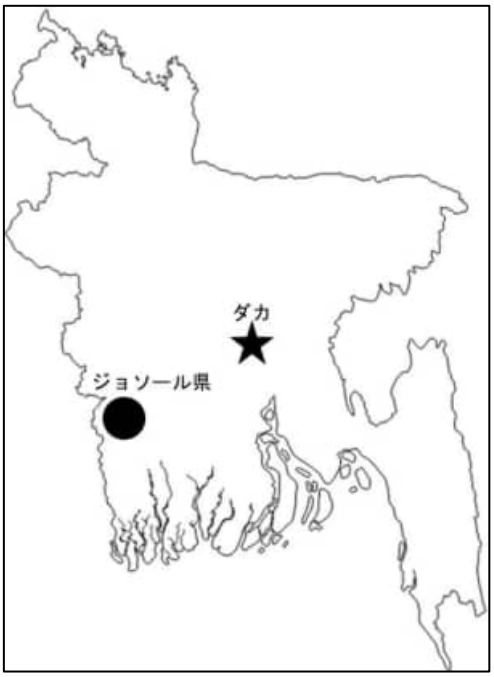

図1　フィールドワークの実施場所
（出所）白地図を基に筆者作成。

聞き取り調査の様子

本研修では、ジョソール県内の17村落で合計21か所の給水施設を訪問し、その管理委員会や利用者などへの聞き取りを実施した。このうち、参加者は16村落における19か所の給水施設を考察対象として共同研究報告書を執筆した。なお、ジョソール県での滞在やフィールドワークのカウンターパートとして協力いただいた現地NGOであるアジア砒素ネットワークのスタッフの方々にも、フィールドワーク中には聞き取りを実施した。また、本研修におけるジョソール県での滞在期間は、日本の市民社会団体であり、バングラデシュ南西部の飲料水問題の解決に向けた取り組みを長年実施している応用地質研究会の現地視察と時期が重なった。このため、フィールドワーク時には、応用地質研究会が実施している中

学校における水教育事業の見学、高校に設置した給水施設の学生による清掃作業の見学、給水施設の視察への同行、応用地質研究会のメンバーに対する聞き取りも実施した。

(2) バングラデシュを知るための行程

本研修の主眼は、上述のバングラデシュにおける飲料水問題に関する調査であったが、それに加えて、現地での行程にはバングラデシュを含む南アジア社会を知るためのイベントも組み込んだ。場所は、バングラデシュの首都であるダカ、バングラデシュ・インド国境のベナポール、ジョソール県内の花市場である。

①アメリカン国際大学・バングラデシュへの訪問と学生間交流

バングラデシュの首都であるダカでは、私立大学のアメリカン国際大学・バングラデシュ（American International University – Bangladesh：AIUB）への訪問を 2025 年 8 月 21 日に行った。まず、本研修担当者による訪問に関するスピーチと、本研修の参加者による英語で自己紹介を行った。その後に、本研修の参加者を 3 つのグループに分け、1 つのグループには本研修における現地でのコーディネートを依頼した Kolpona Ltd.の日本人スタッフ 1 名に参加いただくことで、日本人が 2 人ずつのグループを合計 3 グループ作成した。そして、事前に参加を呼び掛けた AIUB の学生を各グループに十数名配置した。これにより、各グループで、日本人とバングラデシュ人学生が両国における教育、文化、生活、食事、環境などに違いについて、英語で自由に話す機会を 15 分程度設け、学生間交流を実施した。本交流は、両国の学生にとって、異文化理解を促進するともに、英語でのコミュニケーションを実践する場となったと考えられる。

学生間交流の様子

学生間交流後の記念撮影

②バングラデシュ・インド国境の散策

ジョソール県でのフィールドワークのカウンターパートとして協力いただいたアジア砒素ネットワークのご厚意により、バングラデシュ・インド国境のベナポールでの散策が 2025

年 8 月 23 日に実現した。バングラデシュは、ミャンマーと国境を有している東部の一部を除いて、北東西をインドに囲まれている。ベナポールは西部の主要国境のひとつであり、人々や車両が日々行き交う場所である。現地では、日本では見ることができない人々や車両が陸路で国境を越えて行くの様子や、バングラデシュとインドの国境警備隊による国旗降納セレモニーの鑑賞を行った。本散策により、陸路国境という異文化を体験するとともに、南アジアの国際関係・国際情勢への理解の醸成を行った。なお、本散策はバングラデシュ政府からの正式な許可を得て実施した。

バングラデシュ側国境での記念撮影

国旗降納セレモニーの様子

③ジョソール県内の花市場と農園の散策

ジョソール県内に位置するジコルガチャ郡のゴドカリ・ユニオンは、バングラデシュでも有名な花の産地であり、「花の都」と呼ばれている。これは、ジョソール県が花卉栽培に適した土壌と気候条件を備えているためである。バングラデシュ政府によると、ゴドカリ・ユニオンおよび周辺村落では、バングラデシュ国内に流通する花の 80%以上を生産している

花市場の様子

ドラゴンフルーツ畑の様子

（Bangladesh National Portal n.d.）。本研修では、2025 年 8 月 28 日にゴドカリ・ユニオン内の花市場を散策するとともに、花卉栽培農家を訪問した。また、これに先立つ 8 月 27 日には、ジョソール県内の大規模農園を訪問し、オクラやレモン、また日本ではあまり馴染みのないドラゴンフルーツの生産現場を見学した。これにより、バングラデシュにおける第 1 次産業についての学修を行った。

【謝辞】

フィールドワークのカウンターパートとしてご協力いただいた Md. Rezaul Karim 様、Md. Joynul Abedin Zaman 様、Tarul Kanti Hore 様、Md. Toriqul Isman 様をはじめとする現地 NGO のアジア砒素ネットワークの皆様、現地視察の時期が重なったことから、現地で行動をご一緒させていただいた末永和幸様、雁沢夏子様、松本俊幸様をはじめとする応用地質研究会の皆様、現地でのコーディネートでご協力いただいた田中志歩様をはじめとする Kolpona Ltd. の皆様、本研修責任者の友人であり、現地で学生の通訳を務めていただいた Triaana Nayantara Hafiz さんと Sunny Sheikh さん、国際航空券やダカでの宿泊先の手配でお世話になった株式会社 JTB の大橋智美様、そして、フィールドで学生の質問に快く回答していただき、様々な情報をご提供いただいたジョソール県の住民の方々に感謝申し上げる。

【参考文献】

Bangladesh National Portal (n.d.) *Flower Village Godkhali*. https://www.jessore.gov.bd/en/site/tourist_spot/czVK-%E0%A6%97%E0%A6%A6%E0%A6%96%E0%A6%BE%E0%A6%B2%E0%A7%80%E0%A6%B0-%E0%A6%AB%E0%A7%81%E0%A6%B2%E0%A7%87%E0%A6%B0-%E0%A6%AC%E0%A6%BE%E0%A6%97%E0%A6%BE%E0%A6%A8-%E0%A6%8F%E0%A6%AC%E0%A6%82-%E0%A6%B8%E0%A6%AC%E0%A6%9C%E0%A6%BF%E0%A6%B0-%E0%A6%95%E0%A7%8D%E0%A6%B7%E0%A7%87%E0%A6%A4. （最終アクセス日：2025 年 11 月 24 日）。

United Nations (2019) *The Sustainable Development Goals Report 2019.* New York: United Nations.

United Nations Children's Fund, Bangladesh (2021) *Bangladesh MICS 2019: Water Quality Thematic Report*. Dhaka: United Nations Children's Fund, Bangladesh.

United Nations Children's Fund and World Health Organization (2023) *Progress on Household Drinking Water, Sanitation and Hygiene 2000-2022: Special Focus on Gender*. New York: United Nations Children's Fund and World Health Organization.

2025 年 12 月 23 日

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　講師

山田翔太

授業スケジュール

回	月日	事項
1	4/30	自己紹介、授業説明等
2	5/14	【講義】バングラデシュと飲料水の基礎知識
3	5/21	【講義】フィールドワーク
4	5/28	【輪読】谷正和（2005）『村の暮らしと砒素汚染―バングラデシュの農村から―』九州大学出版会（第 1 章、第 2 章）。
5	6/4	【輪読】谷正和（2005）『村の暮らしと砒素汚染―バングラデシュの農村から―』九州大学出版会（第 3 章、第 4 章、第 5 章）。
6	6/11	【輪読】松村直樹（2007）「「安全な水」と「共同管理」をめぐるジレンマ―バングラデシュ砒素汚染対策プロジェクトにおける事例から―」『国際開発研究フォーラム』第 35 号 173-187 頁。
7	6/18	【輪読】下沢嶽（1998）「バングラデシュの NGO の現状」佐藤寛（編）『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所 55-75 頁。
8	6/25	【講義】ビザ申請レクチャー、ベンガル語講座
9	7/2	【グループワーク】調査テーマの模索
10	7/9	【グループワーク】調査項目の模索
11	7/16	【グループワーク】調査項目の模索
12	7/23	【グループワーク】調査項目の模索
13	7/30	【グループワーク】調査項目の模索 【現地渡航前の最終確認】
－	8/20-8/30	現地渡航
14	10/1	人文社会学部ホームページ掲載用「感想と写真」提出 フィールドワークの振り返り、データ分析
15	10/8	【グループワーク】データ分析
16	10/15	【グループワーク】データ分析
17	10/22	【グループワーク】データ分析
18	10/29	【グループワーク】共同研究報告書編集
19	11/12	【グループワーク】共同研究報告書編集
20	11/26	【グループワーク】共同研究報告書編集
21	12/10	共同研究報告書の最終提出 個人報告書の最終提出
22	12/17	「フィールドワーク A」全体の振り返り
－	1 月中	報告書印刷

共同研究報告書

バングラデシュ農村部の飲料水問題と給水施設の維持管理

―管理組合による持続可能な運営体制の検討―

2025 年度「海外フィールドワーク A」参加者[1]
長谷部愛[2]、松田咲優[3]、森川結子[3]、石川陽葉莉[4]、岩井佑季[4]

1. はじめに

バングラデシュでは、地下水が砒素で汚染されている地域があり、生活していく中で安全な飲料水を確保できていない人たちが存在することが深刻な社会課題になっている。そのような場所で暮らす住民たちは、砒素による健康被害のリスクと隣り合わせで日々生活している。安全な水を供給できる代替水源の設置は進んでいるが、これらが整備されただけで住民たちが安全な水を得られるわけではない。代替水源が設置されても、その長期的な維持管理が上手くいかず、結局安全な水を得られずに生活しているのが現状である。

本調査では、こうした課題の背景にある要因を明らかにするために現地を訪れ、住民や水源の管理組合のメンバーへの聞き取り調査を行った。本論では、特に管理組合やリーダーによる水源の管理体制、水源維持のために集める負担金の回収状況、水源のメンテナンスの方法と担い手という 3 つに焦点を当てて、訪れた複数の村の水源管理の実態を比較しながら、理想的な水源運営を行うためには何が必要なのかを考察していく。

2. 研究方法

2-1. 調査対象地の概要

今回の調査活動における対象地域は、砒素汚染被害が国内でも特に大きいとされる、バングラデシュ南西部に位置するジョソール県の農村地帯である。バングラデシュ南西部の地域はヒマラヤからバングラデシュ国内を通って流れる川の下流流域にあたり、この川によってもともとはヒマラヤに存在する鉱脈中に含まれていた砒素が運ばれてくるため、国内の他の地域よりも多くの砒素成分が土中に蓄積されている。そしてそれゆえにこの地域で

---

[1] 以下の参加者氏名は、学年と五十音順で記載しており、筆頭著者等を示すものではない。
[2] 名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科 3 年
[3] 名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 2 年
[4] 名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 1 年

は、アジア砒素ネットワーク（Asia Arsenic Network: AAN）を始めとする様々な支援団体が、安全な飲料水を提供するための代替水源の設置などの活動を行っている。

2-2. 調査手法

調査手法としては現地の村の住民へ直接質問をする形式のグループでの聞き取り調査を行い、水源の維持管理に携わっている管理組合の人やコミュニティのリーダー、また主に水汲みを担当している女性たちからの回答を手書きのメモで残す形で記録した。なお、今回の調査に当たっては現地の関係者に依頼し、英語とベンガル語の通訳を用いたうえで住民への質問などを行った。

質問内容は主に、コミュニティ内における水源の管理組合の詳細、負担金の回収状況、水源のメンテナンス方法の 3 点に関することである。1 点目については、管理組合がどのような人たちで構成されているのか、リーダーは誰でどういった人がなるのか、また管理組合の構成員がどのような形で維持管理に関与するのか、などといったことを質問した。2 点目の負担金に関する項目では、負担金の回収頻度はどの程度であるか、回収は普段誰が行い、いくら集めるのか、住民は負担金を支払うことに積極的か、などを聞き、現在実際に負担金を収集できているかどうかも確認した。そして 3 点目のメンテナンス方法の質問においては、頻度や具体的な掃除方法、また担当者は誰であるのかや作業は共同で行っているのか、などを質問し、住民は維持管理に能動的に携わろうとしているか、また維持管理の責任は分担されているのか、といった点を調べた。

結果の分析に当たっては、それぞれのコミュニティにおける水源の管理方法や管理組合の運営に関する状況に対して、どれほど支援側の求める理想状態に近いかという視点を持ち、継続した維持管理を行えているコミュニティにはどのような傾向があるのかという点を分析した。なお、今回の調査活動を通じて得られたデータや情報は、5 日間という短期間で得たものではあったが、結果の分析などにあたっては実際の村名や個人が特定されないよう倫理的側面にも配慮した上で行った。

2-3. 訪問水源

今回は 8 月 23 日から 8 月 27 日までの 5 日間の活動期間の中で、砒素鉄分除去装置(Arsenic Iron Removal Plant、以下 AIRP)、Super Arsenic Iron Removal Unit（以下 SAIRU)、深井戸(Deep Tube Well、以下 DTW)、ダグウェル・サンド・フィルター、パイプラインなどの水源[5]に訪問し、それぞれの代替水源の稼働状況や維持管理の現状等を確認した。以下に各日にちに訪問した村と水源をまとめ、また AIRP、SAIRU、パイプライン及び DTW に関しては水源の実際の写真も掲載する。

---

[5] 調査では他にも 2 か所の RO に訪問したが、個人ビジネスを展開しているなどの例外的事例に当たる所であったため今回のレポートには含めない。

8 月 23 日

A 村	B 村	C 村
AIRP、SAIRU	ダグウェル・サンド・フィルター	スローサンドフィルター付きパイプライン

8 月 24 日

D 村	E 村	F 村	G 村
AIRP	AIRP	AIRP	AIRP①

8 月 25 日

H 村	I 村	J 村
AIRP	AIRP	AIRP（2 か所）

8 月 26 日

G 村	K 村内の学校	L 村	M 村
AIRP②	AIRP	スローサンドフィルター付きパイプライン	AIRP

8 月 27 日

N 村内の学校	O 村	P 村
DTW	AIRP	AIRP

1. AIRP（右：J 村、左：P 村）

2. SAIRP（A 村）

3. DTW（N 村内の学校）

4. ダグウェル・サンド・フィルター（B 村）

5．スローサンドフィルター付きパイプライン（C 村）

3．結果

3-1．管理の詳細について

本章では、各村に設置された水源がどのような体制によって管理・運営されているのかを明らかにするため、現地で管理組合の構成員や運営の特徴について聞き取りを行った内容をまとめる。以下に、各訪問先で確認された管理体制の概要について示す。

今回訪問した 19 の水源地点において、水源の管理体制には一定の共通点と地域差が見られた。まず、管理体制の中心には「リーダー」と呼ばれる人物の存在が確認された。8 箇所の水源では、リーダーが単独、あるいは中心的な立場で水源を管理しており、その多くが土地を所有する男性であった。なかには、市場で茶店を経営し、資金面・土地面の両方で水源維持に貢献しているリーダーも見られ、地域内で経済的・社会的影響力をもつ存在となっていた。

管理組合を組織し、集団管理の形態をとる水源は 6 箇所確認された。管理組合の人数はおおむね 6～7 人程度で構成される場合が多く、なかには 19 人規模の大きな組織も存在した。運営体制については、設置当初からメンバーの入れ替わりがほとんどなく、安定した運営が続いている水源も確認できた。また、女性メンバーの参加も一部地域で進んでおり、H 村の水源では 7 人中 4 人が女性であった。これに対し、女性の関与が確認されない、あるいはリーダー単独で運営されている水源もあり、ジェンダー面での地域差が見られた。

さらに、学校による公的管理を行っていた水源が 3 箇所あった。これらの水源では、学校が管理主体となり、教員や生徒が協力して維持管理を行っていた。教育現場が地域資源の維持に関わるという点で、他の水源とは異なる特徴を示していた。

一方で、管理組合不在の水源は 2 箇所確認された。このような水源では、負担金を徴収したり水源の清掃を行ったりするなど、定期的にメンテナンスをするシステムが構築されて

いなかった。そのため、安全な水が供給されていなかった。

3-2. 負担金の回収について

まず負担金の回収頻度については、定期的に回収している村と水源の修理が必要な時に限って臨時で回収している村の 2 つのタイプに分かれた。定期的に回収している村では、月単位で回収しているケースがよく見られた。訪れた水源の中で、負担金を回収していた村は 12 箇所であり、そのうち 8 箇所が毎月または半年に 1 回程度決められた額を世帯ごとに支払う形で回収していた。必要な時に限って回収している村では、定期的には負担金を回収しておらず、水源の修理が必要となった時にそれに必要な分の費用を住民から世帯ごとに回収するという方法が取られていた。調査した水源の中では、定期的に回収している村の数のほうが多数を占めていた。

次に負担金の回収方法について述べる。回収方法については、ほとんどの村でその村のリーダーや管理組合の人たちが各家庭を回って集金を行っていた。その際、リーダーが 1 人で回収している村と管理組合の人たちも含めた複数人で回収している村の 2 つのタイプに分かれる結果となり、住民たちが自ら決められた場所や人にお金を渡しに来るというケースは見られなかった。また、回収した負担金は村での会議によって用途が決められていたり、集まった金額や負担金を支払った世帯を記録したりしている村もあった。

最後に負担金の集金状況について述べる。結果としては、修理やメンテナンスに必要な資金が負担金の徴収によって確保できているという村が多かった。しかし、資金が集まっている村の中にもそれぞれ異なる状況があった。すべての住民が支払っている村もあれば、一部の住民のみが支払っている村も存在し、住民の支払いへの協力度にも差があった。さらに、支払いに協力的な村であっても、水源の維持管理に必ずしも積極的とは限らないことが明らかになった。調査の中で訪れた L 村を例に挙げる。この村では、一部負担金を支払えていない住民はいるものの、多くの住民が負担金を支払っており、負担金の回収には協力的であった。しかし、複数ある水源の維持管理を 1 人の男性が担っており、水源の維持管理には住民はあまり協力的ではなかった。また、この村では砒素汚染による患者が存在し亡くなっている人もいるにも関わらず、この事実は住民の水源の維持管理への積極性には結びついていなかった。

3-3. メンテナンスの詳細について

AAN 職員の説明によると、メンテナンスの手順は次の通りである。まず、水源周辺の清掃を行って周囲のごみや汚れを取り除く。次に内部に溜まった汚水を排出し、その後フィルターについた汚れを削り取る。最後に、ろ過槽部分で使用されている砂利の洗浄を行う。ただし砂利の洗浄は半年に 1 回ほどの頻度で行われていれば十分であるそうだ。この手順に沿った適切なメンテナンスがすべての水源で行われているのが理想だが、AAN の職員は「住民たちは水を汲むだけであまりメンテナンスをしない」と厳しい現状を語った。メンテナンス

の頻度・内容・担当者という 3 項目についての調査結果を以下に示す。

まず、メンテナンスの頻度については、定期的にメンテナンスを行っている村、必要に応じて行っている村､そしてメンテナンスを行っていない村という 3 つのケースに分かれた。定期的にメンテナンスを行っている村では設置水源が AIRP の場合、平均的な頻度は 1 カ月に 1～2 回であった。設置水源が AIRP 以外である場合、平均的な頻度は 3 カ月～半年に 1 回であり、メンテナンスの内容に応じて頻度を変更している村もいくつかみられた。また、季節や気象状況によってメンテナンス頻度を調整している村もあった。例えば､A 村の AIRP のメンテナンスは、水の利用量が増加する夏季には 2～3 カ月に 1 度行われているが冬季は 4～5 カ月に 1 度になるという。そして、湖から水を汲み上げている C 村のパイプラインは大雨などにより湖の水が汚くなった場合、湖を掃除することは難しいため、定期メンテナンスに加えてろ過槽の掃除が行なわれるそうだ。

次に、メンテナンスの内容については前述の AAN 職員の説明のとおりである。メンテナンスが行われている場合、水源や村ごとで内容に大きな違いはみられなかった。

最後にメンテナンスの担当者についてはリーダーのみが行う村、リーダーと労働者として数百タカで雇われた住民たちが行う村、住民たち自身が行う村という 3 つのケースに分かれた。結果としてはリーダーのみが行う村が全体の 38%、リーダーと労働者として数百タカで雇われた住民たちが行う村が全体の 46%を占め、住民たち自身が行う村はほとんどみられなかった。しかし、メンテナンスの負担はリーダー 1 人にはかなり大きいようで、B 村でパイプラインを管理するリーダーや、G 村で長年 AIRP を管理するリーダーは自身の負担を強調し、住民たちにメンテナンスへの積極的な参加を求めていた。一方、住民たち自身がメンテナンスを行う村の特徴としては、メンテナンスの方法が村全体で共有されていることが挙げられる。また、AIRP が設置されている村を中心に、応用地質研究会ヒ素汚染研究グループという日本の団体が 3 カ月に 1 回程度の定期点検を行っているケースもみられた。

4. 考察

①管理組合の運営方法、②負担金の回収方法、③メンテナンス方法について調査した結果から、「理想的な水源運営」が行われている地域の共通点を考察する。ここでいう「理想的な水源運営」とは、安全な水が長期的に供給できる水源の状態を指し、以下の項目を満たしている場合を指す。

［1］全ての利用者が水源管理に参加している。
［2］水源管理の責任が分担されている(管理者が複数人いる)。
［3］メンテナンス方法を複数の住民で共有している。

4-1. 住民参加を測るもの

負担金の回収率の高さは住民が水源運営に参加する意識の高さを測る指標にはならない。なぜなら、負担金を定期的に集めていない村でも水源管理は上手くいっていたからだ。調査を行った村のなかで、修理時のみ負担金を集めると回答した村は5つあったが、そのうちの4つは安全な水を供給できていた。したがって、安全な水を供給できていないとされた村では、メンテナンスを行う仕組みがなく、修理をしたことがなかったため、「理想的な水源運営」ではないと判断した。それに対して、G村のAIRP②では、住民は負担金の支払いに協力的ではあるが水源のメンテナンスはリーダー1人で行っており、メンテナンスを持続的に行う環境が十分に整っていなかった。そのため、安全な水を供給することが難しくなる。このことから、負担金の金額や回収頻度の高さは安全な水供給の鍵ではないと結論付けた。住民のなかには負担金を支払っていない家庭もあるが、住民の水源運営への参加意識は負担金だけでは測れない。メンテナンスの方法を学んでリーダーと共に行うなど、住民が水源運営に参加する方法は負担金の支払い以外にもある。さらに、集めた負担金を適切にメンテナンスの費用に使ったり、経済力のあるリーダー自身が費用を負担したりすれば、資金の問題はクリアできる。負担金が定期的に回収されていなくても安定した水源運営は続けることができる。よって、負担金は「理想的な水源運営」において重要ではない。

4-2. リーダーだけでは理想的な水源運営は実現しない

安全な水を長期的に供給するには、水源運営のリーダーが常にいることが重要である。リーダーが村にいることの利点は、水源設置の際に NGO などの外部機関と住民との橋渡しを行えることだ。リーダーが外部機関と連携をとることで安全な水源の設置を迅速に行うことができる。

また、リーダーが水源管理において担う役割は大きい。リーダーは、主にメンテナンスの際に住民に告知をする、負担金を集める、人を雇うなど、何らかの形でメンテナンスに関わっている。リーダーが存在する村のうち、60%がリーダーがメンテナンスの責任を負っている。A村では負担金集めから修理までをリーダーのみで行っている。G村のAIRP②では、22年間水源の責任者を担う男性が、1人でメンテナンスを行っている。また、J村では、帳簿をつけ、水源に柵を設けている点において水源運営は現状上手く機能しているといえる。

確かに、リーダーの存在は安全な水の供給に必要である。しかし、リーダーがいるだけでは不十分である。なぜなら、リーダーが役割を担えなくなれば今まで通りの水源運営が行えなくなるからだ。G村のAIRP②のリーダーは、1人で水源を管理することは負担だと述べている。G村のAIRP②やJ村のように、現時点で水源運営が上手くいっていても、跡継ぎがいなければ持続的な運営は行えない。リーダーを担う住民 1 人に理想的な水源運営の未来を託すのは非現実的だろう。

4-3. 管理組合の有無

水源管理の担い手は複数いたほうがよい。よって、複数の住民で構成される管理組合の運

営は長期的な水源運営に不可欠である。

管理組合のような複数の責任者がいる状態では、役割が分担され、リーダーの負担が減る。さらに、リーダーが役割を担えなくなっても、水源運営の責任が分担されているため、リーダー1 人で行っている場合に比べて対応しやすいと考えられる。これらの理由から、複数の責任者が存在することは持続可能な水源運営に必要である。例えば、C 村では、1 人のリーダーに加えて 6～7 人で水源運営を行っており、メンテナンス時にはさらに人を雇っている。水源運営で中心的な役割を担う人（ここではキーパーソンという）が複数いることで、負担金を支払う住民にアプローチする者、労働者を雇う者、NGO などの外部機関と連絡を取り合う者など、それぞれの業務を効率的に行うことができる。そして、責任が分散され、安全で安定した水の供給が可能になる。

4-4. 後継者を育てるための水源運営

調査の結果から、多くの住民が積極的に水源管理に関わっている村がより理想的な水源運営に近いということが言える。管理組合の有無の他に、メンテナンスを担う住民が複数人存在する村はより理想的な形に近い。学校につくられた水源を例にあげると、水源の清掃を生徒たちが行っていた。教師のみでメンテナンスを行うのではなく、生徒に清掃方法を教え、上級生も下級生も共にメンテナンスを行うことでその水源の利用者のなかで管理法が共有される。これは、長期的に安全な水を供給するうえで重要な点である。メンテナンスの負担が軽減することに加え、複数で維持管理をすることで水源利用者の水への意識は高まる。さらに、将来のリーダー候補がその中から現れるかもしれない。リーダーは外部機関との連携を保つうえで重要な存在である。複数のメンテナンス担当者がいることで、若手や次のリーダー候補が学びやすい環境になる。

5. おわりに

本調査を通じて、安全な水を長期的に供給するという理想的な水源運営には、それを支える管理体制が確立されていることが不可欠であると明らかになった。

管理組合などの適切な管理主体が明確に存在し、負担金の回収が継続し、日常的なメンテナンスが安定して実施されている水源では、設備が良好に保たれ、安全な水の供給が確保されていた。一方で、管理組合が存在せず、責任の所在が不明確な水源では、安全な水を確保できない状況に陥っている例が確認された。また、現状は運営がうまくいっているように見える水源でも、管理が特定の個人に依存している場合や、メンテナンス方法や技術の継承が十分でない場合には、将来的な運営に不安が残ることも明らかになった。

今後も安全な水を供給していくためには、①すべての利用者が水源管理に携わる仕組み、②管理責任の分担、③複数住民によるメンテナンス方法の共有と継承が必要である。さらに、こうした基盤を機能させるためには NGO 等の外部組織とコミュニティが継続的に連携を取り、コミュニティの特性や住人どうしの関係を考慮した水源運営を共に行っていくことが

重要である。

個人報告書

フィールドワークから考える地域課題

―バングラデシュでの調査を通して―

名古屋市立大学　人文社会学部　現代社会学科　3 年
長谷部愛

1. はじめに

国際文化学科の学生ではないが、自分の専攻分野である地方創生や社会問題について学ぶなかで他国の社会課題について関心を持ったため、この海外フィールドワークに参加した。

この授業では、バングラデシュ国内で砒素汚染によって地下水が使用できない地域であるジョソール地方を訪れ、安全な水源が機能しているかを調査した。事前学習を行う前は、飲料水の供給問題の解決策を考えるには、技術的な側面から課題を探る必要があると考えていた。そのため、専攻分野である社会学が調査に活かせるのか不安だった。しかし、ジョソール地方の飲料水の問題では、その地域の社会構成や住人の特性などをふまえて調査を進める必要があり、単なる技術支援だけでは不十分であった。農村では、国や行政による水道事業ではなく村単位で水源を管理している。そのため、コミュニティ間の結束、管理組合の有無によって安全な水の供給状況に大きな差が生じる。

2. 調査で苦労したこと

調査中に大変だったことは 2 つある。1 つは、飲料水の供給方法やコミュニティの特性が日本とは異なると理解した上で調査を進めていくことだ。日本では、上下水道が整備され利用者が水道料金を払えばどの世帯にも安全な水が確保される。しかし、ジョソール地方の農村では、上下水道がない地域が多く、川で洗濯をする住人もいた。調査を行う前は、「水汲みの負担を減らすために水道を拡充した方がいいのではないか」と考えていた。実際に調査をしてみると、水汲み自体にそこまで不満を持っていない住民が多く、水汲みをコミュニケーションの機会として楽しんでいた。このような日本とのコミュニティの違いを受け入れるのに苦労した。

2 つ目は、言語の壁だ。自分が聞きたい項目があっても、英語でうまく通訳の方に伝えられなかったり、質問しても住民の方から聞きたかった意図と違う返答が帰って来たりと、現

地でのインタビューでは苦労した場面が多々あった。日本語の細かなニュアンスを英語で表現できず、本当に聞きたいこととずれてしまうときにもどかしさを感じた。英語で質問をして回答をメモしていくという経験は初めてだったために、自分の言語能力の不十分さを実感した。

調査を終えてから調査内容をまとめていると、聞けている項目とそうでない項目があって、考察をつくるために必要なデータが十分にそろっていないことがあった。調査前に質問事項をまとめたつもりだったが、水源ごとのリーダーの有無やメンテナンスに携わる人々の詳細など、調査を終えてから重要なデータを取れていないことに気づき、調査中も質問項目の内容を見直す時間を設けるべきだった。

3. バングラデシュでの人々とのかかわり

今回の調査で特に印象に残ったのは、バングラデシュの人々との交流だ。首都のダッカでは、アメリカン国際大学・バングラデシュ(AIUB)の学生と交流した。彼らはデータサイエンスなどを専門に学びながら、語学にも長けていた。彼らは日本の技術に興味を持っており、日本の技術力の特徴や、それをどうバングラデシュに活かせるかについて質問を受けた。彼らとの意見交換から、自分たちの国をよりよくしようという思いが伝わった。この交流をきっかけに、日本の産業や政治・経済について調べるようになった。

首都のダッカとジョソール地方の学校は雰囲気が全く異なっていて、その違いも非常に興味深いと感じた。ジョソール地方の小学校を訪れた際、たくさんの生徒が温かく出迎えてくれた。東京駅や広島の路面電車、柴犬などの写真を見せたとき、とても興味を持ってくれたのが嬉しかった。彼らにサインや写真を求められとても驚いたが、好奇心旺盛で初めて会ったのにも関わらずたくさん話しかけてくれたので、学校での時間を楽しく過ごせた。この交流をきっかけに日本に興味を持ってくれたら嬉しい。

農村地域では、砒素問題に精力的に取り組まれているアジア砒素ネットワーク(AAN)のスタッフの方々との交流が印象に残っている。彼らの話によると、砒素問題を解決するには、水源を設置するための資金援助や技術支援の他に、利用者に危機意識を持ってもらうことが重要だそうだ。彼らは水源設置のサポートを行った後、メンテナンス方法を利用者に教えている。さらに、こまめにその水源を訪れて水源が機能しているか、管理体制に問題が起きていないか確認している。しかし、プロジェクトベースで活動するが故に時間や予算の制約があり、水源を設置してからのサポートが十分でない地域が多くある。彼らは、継続的に利用者との交流を続け、セミナーを行って砒素への危機意識を持ってもらう活動を続

学生との交流

けることで、長期的な視点で砒素問題に取り組んでいた。彼らの話は、その後の調査や考察を作成する際に非常に参考になった。

アメリカン国際大学・バングラデシュ(AIUB)にて

調査期間中はアジア砒素ネットワーク(AAN)のオフィスに滞在していたので、調査に同行していただくだけではなく、一緒に食事をしたり、家に招待していただいたりなど、本当に良くしていただいた。バングラデシュでの調査を実りあるものにできたのは、スタッフの方々が常に親切にしてくださったからだと強く思う。調査対象である集落の住民の皆さんは調査に快く協力していただき、彼らの家でお菓子をふるまってくれた。訪問者をベッドに通すという日本と違うもてなし方に驚いたが、優しく受け入れてくれたことがとても嬉しかった。バングラデシュの人々との関わりは、新しい価値観を吸収し、自分の国の文化や社会について捉え直すことにつながった。アジア砒素ネットワーク(AAN)のスタッフの皆さん、調査に協力してくださった集落の方々、通訳さんなど、多くの方が協力してくださったことに大変感謝している。

4. 調査を終えて

この調査を通じて、地域に合わせた支援策や運営方法を考える重要性を学んだ。実際に現地で調査をしてみると、村によって水源管理の方法や住民の意識に違いがあった。また、一見水問題と無関係に思える村の光景からも、課題解決のヒントが得られると感じた。こうした体験を通じて、今まで学んできた社会学をより実践的に捉える力が養われたと思う。今回のフィールドワークで得た学びを活かし、日本や世界各国の地域課題や多文化共生について理解を深めていきたい。

バングラデシュ研修から得た学び

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化学科　2 年
松田咲優

1. はじめに

このレポートでは、筆者がバングラデシュでの研修を通して得た学びや気づき、またバングラデシュという国について感じたことを述べる。最初に、農村での飲料水問題の調査活動を通じて学んだことを述べ、次に NGO スタッフへのインタビューから代替水源の維持管理に関して考えたことを述べ、最後にバングラデシュで数日間を過ごす中で筆者が感じた日本との違いや、個人的に印象深かったことについて述べる。

2. 農村での飲料水調査活動を通じて得た気付き

まず、渡航前の事前学習の中で谷正和の 『村の暮らしと砒素汚染』を読んだが、いざ現地に行って実際の状況を見てみると、この本の中に書かれていた内容と、現在の状況は少し異なる部分があることを知った。この本の中では「パルダ」という西アジアから南アジアの文化に見られる女性の行動制限に関する伝統的習慣の話が取り上げられており、これが原因で現地では主に水を汲む主体である女性たちが、家族以外の男性の目を避けるため代替水源ではなく家の井戸を使ってしまうことがあると学んだ。しかし実際に現地に行って聞き取り調査をすると、現地の女性達は水を汲みに外へ行くことに対して何も苦痛などは感じていないようだった。

このような現地を訪問したからこそ発見できた事実があったことは、調査の際はデータの古さあるいは新しさを認識した上で慎重にそれらを使わなければならないことや、現地の状況や人々の意識は常に変化しうるため、そういった変化を追いながら問題の現状や課題を理解しなければならないことを学ぶ良い機会となった。また、住民がどのような方法で水源の維持管理を行っているかということも村ごとに違いがあり、この点も実際に渡航したからこその発見であったため、興味深かった。

3. NGO スタッフへのインタビューを通じて

アジア砒素ネットワーク（以下 AAN）スタッフへのインタビューからは、飲料水問題の現状や過去の支援の歴史について様々な学びを得ることができた。まず、AAN がこれまで住民に呼びかけや注意喚起をし必死に働きかけてきたこと、しかし未だいくつものコミュニティでは水源の適切な維持管理が実現できていない現状があること、そしてこの飲料水問題はただ代替水源を設置すれば解決する問題ではなく、さらなる技術の開発や住民への

装置のメンテナンス方法の教授などが必要であることを知った。しかしこれまでの活動の歴史を聞く中で、何十年と解決することのできなかったこの飲料水砒素汚染問題が、AAN の継続的な支援により少しずつ解決に向かっていることや、住民の意識が過去と比較すると徐々に変化してきているなどの良い変化も起きていることが分かった。

学校訪問において生徒たちと

すぐに被害が出るわけではないために、AAN が多くのプログラムを通じて人々の意識を高めようとしてきたにもかかわらず、今でもユーザーの多くが問題の重要性を理解していないという話のところでは、人々が緊急性を感じられないために危機感を持ちづらいというこの問題の厄介さを実感し、NGO など外部からの継続的な啓発活動の必要性を学んだ。また、AAN がこのような解決が難しい問題に対しても、水源を設置した後住民コミュニティを管理し水のくみ方やメンテナンス方法を教えたり、ミーティングに参加して住民と良い信頼関係を気付くように心がけたり、村のリーダーや宗教指導者など多くの人が尊敬するような人と問題について話すようにしたり、多くのことに気を付けながら住民と向き合ってきたことを知り、ここから支援者側は被支援者をよく理解し、責任感のある支援を実現すべきであることを学んだ。他にも水源の設置に関して AAN は単体で十分な資金を出すことができずドナーが資金援助などを行っていることを知り、必要だからといって自由に水源の建設を行えるわけではない事情があることを知った。

以上のように、AAN のスタッフとの話からは、国際支援の難しい点や様々な事情のもと活動を行っている現実について知り、リアルな国際支援の在り方について学ぶことができた。

4. バングラデシュという国について

最後にバングラデシュという国で数日間滞在する中で感じたことや印象的だったことについて述べる。まず、バングラデシュでは人口密集度が非常に高く、人がいないところがなかった点が印象的だった。特に首都のダッカでは、人が歩くスペースもないほど自動車やバスが路上に敷き詰められ、信号も横断歩道もない中クラクションを絶えず鳴らしながら車両が走行する光景がとても新鮮で、その混沌とした様子はバングラデシュの人口の多さをよく反映しているように感じた。食事の後の紅茶

農村での調査活動

を飲む習慣や食事を手で食べるといった、日本との文化の違いも興味深かった。

ほかにも個人的に印象的だったことは、人と人の距離が近いということである。バングラデシュの人々は人懐っこい人が多く、現地の学校に訪問した際に学生たちに取り囲まれ握手や写真を要求された経験はこれまでの海外経験の中でしたことがなかった。

現地のゲストハウス前にて

また、現地で調査活動に協力してくれたバングラデシュ人の関係者が様々な話をしてくれたのも貴重な体験だった。彼らが教えてくれたのはバングラデシュ人が持つ白さに対する美的意識や、外国から来た人に対し遜った態度を取ってしまうといった話で、今でもイギリスの植民地だった時代の価値観や習慣は残っていることを実感した。現地の人々と触れ合う中で、人々もバングラデシュの魅力の一つだと感じたが、同時に発展途上国や元植民地国家としての一面も人々との交流から強く感じた。

5. まとめ

今回のフィールドワークでは、バングラデシュの農村地帯で起きている飲料水問題に対する理解を深めることができたほか、NGO による国際支援等は実際にどのような形で行われているのかについて知見を得ることができ、非常に充実した学びの機会となった。筆者にとって南アジア自体が未知の地域であり、バングラデシュに行く前は国家としての固定観念しかもっていなかったが、実際に現地に行って様々な体験を積む中で、バングラデシュに対する印象がよい方向へ大きく変わることも実感した。このように、これまであまり親しむことのなかった国の文化や生活に直接触れることで自分の視野を広げることができたし、また、その国と向き合って自分自身で良さや魅力を見つけるように努めれば、どんな地域を対象にしても新しい発見を得たり、良い学びの機会を得たりできることを学んだ。

共に考える援助のあり方

―バングラデシュの現地から見えた援助の実態と課題―

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化学科　2 年
森川結子

1. はじめに

今回のバングラデシュでの現地調査を通して、筆者の援助のあり方に対する価値観は大きく変わった。調査を進める中で、多くの人々と対話し彼らの思いに触れ、彼らの生活・文化を体感したことで、単に「安全な水を得られる水源を与えること」では解決には至らないという水問題の解決や援助自体の難しさや複雑さを強く実感した。
本報告書では、現地調査を通して見えてきた水問題解決の実態や課題、気づき、そしてそこから考察した「共に考える」援助のあり方について述べる。

2. 援助のあり方

(1) 調査で見えた水問題解決に対する課題

現地で調査を行って、援助はただ「与えること」ではなく「共に考えること」であると感じた。途上国援助というと、物資の供給や設備の建設などが思い浮かべやすい。近年は SDGs（Sustainable development goals：持続可能な開発目標）の影響もあり、持続可能な社会を目指した参加型開発も広まってきている。しかし、調査を行う中でこれらの援助がどれだけ根本的な問題解決に繋がっているのだろうと疑問に思った。今回訪れた村には、砒素汚染がされていない水を供給できる代替水源が設置されていたが、それらの維持管理が適切に行えていない村が多く、その代替水源によって 100%安全な水が供給できているわけではなかった。また、代替水源を適切に維持管理して長期的に水源の運営を行っていくためには、住民がメンテナンス方法を学び継承すること、メンテナンスに十分な資金や人を集めること、砒素汚染された水を飲むことに対する危機意識を持つことなど様々な要素が必要であることも分かった。

代替水源を使う村の女性

これらのことを踏まえると、まずただ代替水源を設置すればバングラデシュの水問題が解決するわけではな

いということは明らかである。さらに、ただ住民と協力して一緒にやればいいということではないとも感じた。外部の有識者が知識や管理方法などを住民に教えるだけでは、問題の根本的解決には繋がらない。たしかに彼らが持つ知識や情報は正しい情報かもしれない。しかしそれが現地の人々にとって最適なものなのかは私たちだけでは判断できない。事前学習や調査のはじめは、代替水源を設置して、その正しいメンテナンスの方法やどうやったらそれを続けることができるかを現地のそれぞれの状況に合わせて伝えればいいと思っていた。しかし、調査を進める中で水源の維持管理が上手くいっていない村では、「もう興味なくなってしまった」「自分たちだけじゃもうどうしようもない」という声があった。これらを聞いて住民の思いは援助の方法に反映されていなかったかもしれない、援助する側は知識や技術、方法を「与える」だけになってしまっていたのかもしれないと気付いた。たとえその方法が住民主体で行っていくものだったとしても、悪く言えばそれは援助国側の価値観で考えた提案を住民の同意なく押しつけているということになる。

(2) 課題を踏まえた援助のあり方の考察

私たち援助国側が持つ価値観をそのまま与えたり押しつけたりしても、現地の人にとってそれは必ずしも最善ではない。そこで「共に考えること」が援助において大切だと考えた。援助する側が一方的に正解を提示するのではなく、現地の人々の価値観や生活を尊重しながら、どのような支援が自分たちの生活に無理なく組み込めるのかを一緒に模索していくべきである。

そのためには、まず援助を行う前に私たちが現地の生活や価値観を理解する必要がある。渡航前は、バングラデシュに対して「貧困」「汚染」というネガティブな印象を強く持っていた。ニュースや SNS で目にした「アジア最貧国」「世界最悪の大気汚染」というレッテルが強く印象に残っており、渡航前はほぼ初めての海外でワクワクする気持ちもあった一方不安も大きかった。しかしいざ現地に着いて生活してみると、その固定概念は覆された。たしかに初めて見る日本とは異なる世界に驚き、正直「これが途上国か」と思ってしまった。しかし、10 日間どこに行ってもバングラデシュの人々は私たちを温かく受け入れ歓迎してくれ、調査の中で村の人々の繋がりや現地の文化も感じることが出来た。彼らは物質的に豊かな生活を送ることは出来ていないものの、そこには人との豊かな繋がりや彼らなりの幸せがあり、日本の「豊かさ」とは全く異なる幸福観があるように感じた。

バングラデシュの農村の町並み

このようなポジティブなものとは反対に、実際に調査を行ってみて聞こえてきた「水源の維持管理に興味がなくなってしまった」という住民の声はとても印象的だっ

た。本来、水源の維持管理は自分たちの健康や生活に直結する問題であり、単なる興味の対象で終わるものではないはずである。しかし、外部から方法や設備だけが与えられその過程に十分に関われないと、住民にとってそれらは「自分たちの資源」ではなくなってしまう。つまり、支援の段階で住民が主体的に関われていなければ、水源の問題は「自分事」ではなく「外から与えられたものの管理作業」になってしまう。だからこそ、こちらから正解を提示するだけでは不十分である。彼らは彼ら自身の価値観を持って生活しており、それが私たちの持つ価値観と完璧に一致することはない。そもそも住民にとっては正解と言えないかもしれないものを押しつけるのは適切ではなく、今ある生活を考慮しながら一緒に正解を見つけていくべきでありその過程を重要視すべきである。

3. 最後に

今回の海外フィールドワークへの参加は、筆者にとってかけがえのない経験になった。たった 10 日間という短い期間ではあったが、今回現地を訪れることが出来たからこそ、先進国で暮らす日本人と途上国で暮らすバングラデシュ人の価値観を違いに触れることができた。そしてそこから、改めて援助とはどうあるべきなのかを問い直すこともできた。先進国で暮らす私たちが途上国に対して、援助を行うことは簡単である。しかし、その援助が彼らに与える影響を最大化させることはとても難しいと感じた。これは日本でどれだけ勉強しても得られないものだと思う。たくさんの初めてとたくさんの人との出会った 10 日間での学びを今後も大切にしていきたい。

紅茶と親しみの文化

―バングラデシュと日本の比較考察―

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化課学科１年
石川陽葉莉

1. はじめに

今回のフィールドワークを通して、日本とバングラデシュにおける「もてなし」のあり方に関心を抱いた。バングラデシュでは、食事後や交流の場において紅茶やお菓子が提供され、来客や目上の人に対して温かいもてなしをする様子が頻繁に見られた。Asia Arsenic Network （以下 AAN）職員の方々による手厚いサポートや、学校や村を訪問した際の紅茶やお菓子の提供などから、バングラデシュでは他者を思いやり、歓迎する精神が社会的に根付いているのではないかと考えた。また、このような文化は日本における「おもてなしの文化」と類似しているとも感じられた。本レポートでは、両文化を比較しながら、人々がどのように他者との関係の築いているのかについて考察したい。

2. バングラデシュのもてなし

まず注目されたのは、紅茶を通じたもてなしの慣習である。バングラデシュでは、家庭や村、学校、職場など、あらゆる場面で紅茶が提供される機会が多く見られた。たとえば、昼食後や会議中に紅茶とともに甘い菓子やドイが出されることがあり、これは客人や参加者に対する心配りの一種として機能していると考えられる。紅茶の提供は単なる飲食の提供にとどまらず、「共に過ごす時間を大切にする」姿勢を象徴しているように感じられた。このような習慣は、客人を歓迎し、関係を円

バングラデシュで
提供された紅茶

予定外の場所で
ごちそうになった紅茶

滑に築くための非言語的なコミュニケーション手段として社会的に共有されているといえるのではないだろうか。

次に注目すべきは、人と人との関わりの中に見られる思いやりやもてなしの精神である。滞在中、AAN 職員の方々は調査活動の支援にとどまらず、参加者がバングラデシュをより深く楽しめるようにと、予定外の観光地や国境への案内など、さまざまな体験を提供してくれた。また、食事の際には料理を取り分けてくれたり、お皿に盛りつけてくれたりするなど、細やかな配慮が随所に見られた。これらの行為は単なる親切心に基づくものではなく、「相手に快適に過ごしてもらうこと」を重んじる価値観の表れであり、もてなしを通じた関係構築の一種であると考えられる。

バングラデシュ最終日に提供された特別な食事

インタビュー中に村の人にごちそうになった間食

3. 日本と比較したバングラデシュの他者との関係の築き方

バングラデシュにおけるもてなしの在り方は、日本の「おもてなし」と多くの共通点を有している。日本でも来客にお茶を出すことは一般的であり、食事の際には相手に先に料理を取り分けたり、座る位置や言葉遣いに気を配ったりする。いずれの文化においても、相手の立場に立って配慮を行うこと、またその行為を通して円滑な人間関係を築こうとする姿勢が重視されている点は共通している。

しかし一方で、両者の「もてなしの表現」には違いも見られると感じた。日本のもてなしは、相手に対して一定の距離を保ちつつ、控えめで丁寧な態度を重んじる傾向がある。形式や礼儀などに細やかな気配りが求められ、相手に不快感を与えないようにすることが優先される。これに対し、バングラデシュのもてなしはより直接的で親しみやすいと感じた。初対面の私に対しても、現地の人々は気さくに話しかけ、笑顔で肩を叩いたり、頭をなでたりするなど、身体的な接触を通して親近感を表現していた。特に村のリーダーや AAN の職員の方々は、形式的な上下関係よりも人と人との距離の近さを大切にしているように見えた。実際、私が滞在していたゲストハウスでも、スタッフの方々は常に笑顔で迎えてくれ、会話の中でジョークを交えながら場を和ませてくれた。こうした交流の中には、日本のもてなしが

相手の心を察する静かな気遣いであるのに対し、バングラデシュのもてなしは相手の心に直接触れる温かい交流として表れていると感じた。この違いこそが、両国の人間関係の在り方を象徴しているのではないだろうか。

4. 終わりに

総じて、バングラデシュと日本のもてなし文化には「思いやり」「尊重」といった共通の価値観が存在する一方で、その表現方法には差がある。日本では礼儀や形式を通じて相手を敬うことに重点が置かれ、バングラデシュでは親しみやすさや感情の共有によって相手を歓迎する。この相違は、「他者とどのように関係を築くか」という価値観の違いを示しているのではないだろうか。どちらの文化も、相手を大切に思う気持ちを基盤としている点では共通しており、もてなしのあり方を通して両国の人々の温かさと人間的なつながりの深さを改めて感じることができた。

バングラデシュの生活環境から考える「豊かさ」の定義

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化課学科 1 年
岩井佑季

1. はじめに

今回の調査では、バングラデシュでの代替水源の利用状況や水に対する意識だけでなく人々の暮らしの多様さを知ることができた。特に印象に残ったのはバングラデシュの生活環境と人々の暮らしだ。私は渡航前の事前学習で読んだ文献（『村の暮らしと砒素汚染-バングラデシュの農村から-』『バングラデシュの NGO の現状』）の内容や写真から、バングラデシュの人々は中学や高校で使用していた教科書で「発展途上」と表現されるような雑然とした環境の中で、とても豊かとは言えない暮らしをしているのだろうと勝手に想像していた。また、水の供給における課題についても国中に水道設備が普及すれば解決するのではないかという単純な考えを持っていた。しかし、実際に現地を訪問し、人々の生活の様子を観察すると、そこには私の渡航前の想像とは異なる部分が数多くあった。バングラデシュの都市部・村の暮らしの観察を通して考えさせられたのは「発展しているとは何なのか」、「豊かであるとは何なのか」についてである。

2. 現地での観察

(1) 首都ダッカ

バングラデシュ入国後から調査開始までの数日間、首都ダッカに滞在した。ダッカは人口密度世界 1 位を誇る国の首都なだけあってかなり人の多い都市だった。空港から街中までは高速道路が走っていて、常にたくさんの人と車で混雑する下道沿いには露店やビルが立ち並んでいた。市内は夜になってもネオンサインや電光掲示板の光で明るく、綺麗に装飾されたリキシャが走り、カラフルな T シャツや民族衣装を着た人々が歩いていたためとても賑やかで栄えているように感じた。筆者たちは比較的治安の良いとされているバリダラ地区に宿泊したが、同じダッカ市内でもその地区の中と外では雰囲気がかなり違っていた。地区内にはホテルや商業施設、各国大使館などがあり、そこで出会った人々は街中で目にした人々よりも華やかな服装・アクセサリーを身に着けていた。ま

深夜のダッカ

市内を走るリキシャ

訪問した大学の屋上から眺めたダッカ

た、水の供給に注目してみてもダッカ市内ではトイレや水道などが簡単に利用でき、レストランやスーパーではペットボトルの飲料水が販売されていたため、安全な水へのアクセスはそれほど難しくなさそうであった。

筆者は事前学習の中で「発展途上」と紹介されていたバングラデシュに高速道路や電光掲示板を掲げる高層ビルがあること、人々がインフラの整備された環境で経済的にも物質的にも割と豊かな生活を送っているように見えることにかなり驚いた。

(2) 農村ジョソール

ダッカに数日滞在した後、南西部ジョソールへと移動して調査を行った。調査の拠点となったアジア砒素ネットワーク・バングラデシュ（AANB）のオフィスがある地域は水田や森、湖などの周辺に村が点在する自然豊かな場所で、人々は牛やヤギや鳥たちと共存していた。そこはダッカ市内と違って上下水道が整備されているわけではなく、NGO や政府機関が設置した井戸やパイプラインが水源として使用されていた。また、ダッカ市内、特にバリダラ地区で見たような豪華な衣服や装飾品を身に着けたいかにも富裕層といった人の姿も見られなかった。

安全な水の確保が課題である村という環境とそこでの人々の暮らしがとても印象に残っている。実際の水源や女性たちが水源を使用する姿を見たときは事前学習をしていたとはいえ、「本当に水源が設置されているんだ。」、「本当に女性たちはコルシを抱えて水汲みをしているんだ。」と驚き、まるで本の中の世界に入ったかのような感覚になった。また、村という小さなコミュニティだからこその特徴は人々の繋がりだ。水源が村人たちによって維持管理されていたこと、女性たちが複数人で会話をしながらどこか楽しそうに水汲み

AIRP で水汲みをする女性

コルシに水を汲む女性たち

をしていたり子どもたちや男性がそれを手伝っていたりしたことからも村内に協働する意識があることが分かったし、調査のためのインタビューからも村のまとまりを感じることができた。調査では私たちがある村人に話を聞いているとその周りに年齢性別関係なく続々と人々が集まってきて大きな輪ができ、最終的にはあちこちから返答やそれに対する訂正が聞こえてくるというのがお約束になっていた。

3. 「豊かさ」とは

現地での観察を経て気がついたのは、筆者にとっての「豊かである」「発展している」の定義は日本を基準にした技術力・経済力であったということだ。だから「発展途上」という枠組みに入るとされるバングラデシュの都市部の環境・暮らしを見て想像以上に日本に近い様子に驚き、初めて村を訪問した時には大変な思いをしなければ水を得ることができない彼らの生活と蛇口をひねるだけで好きなだけ水を得ることができる私の生活を比較してあまりの差に申し訳なく思ってしまった。そして彼らの暮らしをなんとか良くできないのか・水道を整備することは選択肢にないのかとも考えてしまった。しかし、約 1 週間多くの人と関わりながらバングラデシュの生活を体験した今はそのような考えがいかに間違ったものであったかが分かる。確かにバングラデシュの農村の環境・生活はダッカや日本の環境・暮らしと比較すると経済的・技術的に豊かで発展しているとは言い難いし、ダッカの暮らしも日本の環境・暮らしと比較すると経済的・技術的に豊かで発展しているとは言い難いように思う。だが、発展や豊かさの度合いは部外者が経済的な指標・技術的な指標を用いて判断できるものなのだろうか。バングラデシュの人々、特に農村に暮らす人々と関わることでその思いが強くなっていった。水を取り巻く環境に注目すると日本やダッカでは水道代を支払う、飲料水を購入することで安全な水を手に入れているが、村では水汲みや水源の維

持管理という形で労力や時間を費やさなければ安全な水を得ることができない。だが、水汲みをする女性たちの中には水汲みの時間を友人たちと会話をする楽しい時間として捉えている人もいたし、そもそも村の中には「水は日常的に購入するもの」という意識がないため時間と労力をかけて水を得ることは彼らにとっては日常で、水汲みや維持管理は大変だと話すものの、自分たちの水環境が恵まれていないと文句を口にしたり嘆いたりすることは決してなかった。むしろ日本やダッカのような水環境を追求して水道を設置してしまったら村人同士が会話をする機会や協働する意識、コミュニティとしてのまとまりは失われてしまうのではないか。水以外の環境に目を向けても同じだ。農村には電光掲示板を光らせた高層ビルや、食事をしながら大きな窓から夜景を眺めることのできるレストランはない。また、そこでは道路をバイクや車が埋めつくすことも人々が携帯電話を手にあわただしく行き交うこともない。村人たちは木々に囲まれた集落の中の平屋に暮らし、道路沿いの露店で買い物をし、野菜や肉、魚など素材の味をそのまま感じられる料理を作り、それをゆっくりと時間をかけながら味わっていた。普段スマートフォンを手にあわただしく過ごし、多くの人と会話をしながら食事を楽しむことがあまりできていなかった筆者は村人たちやAANB の方々があたたかく受け入れてくれたこともあり、ゆっくりと流れる時間の中で人と関わることにいかに価値があるかを実感した。そこでの暮らしの豊かさは技術的・経済的指標では測ることができない、測ってはいけないものだろう。

自然豊かな村の風景

4. おわりに

今回の調査を通して筆者は自分がどれだけ狭い視界で物事を見てきたのかを思い知らされた。そして世界と、他者と関わる際の新たな視点を学んだ。ある場所で生活している人にとっての普通を経済的・経済的に「発展していない」「豊かでない」と評価するのは一方的な価値観の押し付けだし、自分が生活してきた環境を基準に他者の環境に対して憐みの気持ちを持つなんてすごく上から目線で失礼だ。失礼な考えを持っていたことを反省すると同時に、バングラデシュでの滞在中に助けてくださった方々、調査に協力してくださったすべての方々に感謝を伝えたい。この気づきと学びは身勝手な判断基準や先入観に左右されない姿勢での学習や人との関わりを目指すうえで大きな助けとなると確信している。

次回参加者へのアドバイス

これからバングラデシュへ行く人へのアドバイス

長谷部愛

【調査面】

・ 質問事項をリストアップすると思うが、その質問表を Word だけでなく Excel で表にしてまとめたほうがいい。
　→ 実際にインタビューしているときに、文字より表のほうが見やすいし、何を聞いていないかわかりやすいから。
・ 世帯数など、定量的なデータもとった方がいい。
　→ 報告書を書く際に説得力が増す。各データを比較するときにわかりやすい。
・ 1 日の終わりにメンバーとどんなデータが得られたか確認したり、明日聞きたいことをまとめておく。
　→ 人によって聞き取れたものとそうじゃないものがある。それに、その日の調査をふまえて新たに聞きたいことも増えることがある。

【持ち物】

・ カップラーメンのようなおかず系より、春雨スープのような優しい味のものが良い。バングラデシュ料理は味が濃いものが多いです。
・ めっちゃ甘いスイーツしかないから、和菓子などのやさしい甘さのものがあって助かった。
・ 胃薬必須（私の場合）
・ 変圧器は対応している電力量を確認してから用意してください！
・ Wi-Fi がある場所が多いので 10 日間で 3 ギガくらいしか使いませんでした。

【その他】

・ できるだけたくさんの人と話してください！気さくな人が多いし、日本に興味持ってくれます。それに、NGO の人や通訳の人と話して仲良くなることで調査中も質問しやすいです。実際に現地の人と交流するのがフィールドワークの醍醐味だと思うので、たくさんの人と交流してみてほしいです。

次回受講する方へ向けて

松田咲優

現地で聞き取り調査をする際に気をつけた方がいいことについて述べる。まず、現地では1 つの村に滞在できる時間があまり無い。訪問している間は質問だけでなく、村内を歩き、水源を視察し、また村人からの回答を記録したりするため、質問は短く端的に聞けるよう準備しておくことを勧める。

また、村毎に異なる質問をするのではなく、同じ質問を全ての訪問先においてするようにした方が、後に得られた情報を処理する際にデータを比較したり考察を立てたりしやすいため、どの村においても必ず聞く質問を事前に決めておいた方が良い。

また、事前に質問の項目などを考える際は、帰国後どういったテーマのレポートを書くか、つまりどういった点に焦点を当ててレポートを書くかを見据えて、必要な情報のみを聞き出せるようよく考え内容をある程度厳選しておくと短い時間内でも情報を集めやすく良いと思う。

持ち物に関しては、農村を訪問するのがバングラデシュにおいて雨季に当たる時期であるため、靴が少なからず汚れることを予想し、簡単に洗えるサンダルなどを持参する事を勧める。また、飲料水はゲストハウスやホテルにて無料で貰えるため、水を買うためのお金はあまり持っていかなくてもよかったと個人的に思った。

バングラデシュでのフィールドワークにあたって

知っておいたらいいこと

森川結子

【持ち物について】

- 虫がだめな人は虫除け必須
  - 自分に使えるもの
  - 部屋で使えるもの
- 洗濯は手洗いのため、洗濯洗剤や洗濯できる袋・容器・干せるもの等は持って行く。
  - リセッシュなどがあると洗濯の回数が減って楽かもしれない。
- ドライヤーが使える変圧器を確認しとく。
- 小さいカバンはあったほうが良い。
  - パスポートとか貴重品だけ入れて持ち歩けるようなもの

- 調査中の持ち物　これらが入るだけのカバンもあったらいいかもしれない。
  - ペン
  - モ取るもの
  - 飲み物
  - 帽子
  - スマホ
  - モバイルバッテリー
  - 貴重品（財布・パスポート等）
- 食事
  - 基本的に辛めなもの・味が濃いものが多い。
  - 日本食を持って行くなら味が薄めのもの持って行くと良いかもしれない。
  - ペットボトルの水はたくさんあるので、飲料水や歯磨き等に使う水には困らなかった。
- 服装
  - 汚れてもいいもの（ジャージ・T シャツ等）
  - 日本ほど暑いわけではないので上着を着ていても過ごせる。
  - 3 セットくらい持って行けば十分
  - サンダル必須
  - スニーカーは汚れてもいいものを履いていく。
- お土産用の荷物のスペースは空けておく。

- ➢ 物価が安いため、たくさんお土産を買いたくなる。
- 道路がとても揺れる＆移動距離が長いため酔い止めは必須

【調査に関して】

- 事前に質問項目を一覧化しておいて、質問に抜け漏れがないようにする。
  - ➢ 帰国後調査結果をまとめる時に、それぞれの水源を比較できるようにするため
- 事前に質問項目を考えていても、実際現地に行ってみると聞きたい質問が色々出てくる。
- 通訳を介す分、こちらの質問のニュアンスと得られる回答が異なる場合もあることを考慮しておく。
- どんな小さな情報でも後々役立つかもしれないのでメモを取っておく。
- どんな小さなことでもとりあえず聞いておく。
- 英語に不安があるかもしれないが、拙くても言葉にすれば意外と伝わるし、通訳の方が私たちの言いたいことを汲み取ってくれたりする。

バングラデシュ現地調査に向けたアドバイス

―楽しく深いバングラデシュ研修になることを願って―

石川陽葉莉

【調査を行う際に、どのような点に気を付けた方が良いか】

- 現地では、雨や土のぬかるみがたくさんあります。足元が不安定なところも多いです。靴が汚れるので、サンダルがあるといいと思います。
- 感染症を持っている可能性がある虫がいるかもしれません。虫には十分に気をつけたほうがいいです。虫よけスプレーは持ち歩き必須です。
- いろいろな場所を回るので、メモ帳などをなくすと大変です。現地スタッフの皆さん、他の受講生に迷惑をかけてしまいます。毎回、車に乗り降りする際に荷物がすべてそろっているか確認するのが大切です。
- 「ありがとうございます」などの簡単なベンガル語は覚えてから行くと現地の人に直接お礼がいえるのでおすすめです。
- メモしているときに聞き取れないことがあっても、その場で他の受講生に聞かないということは大事だと思います。わからなかったところは一旦飛ばして、聞き取れるところをできる限りたくさん拾うことが大事です。聞き取れなかった部分はあとからほかのメンバーに聞いて共有すればいいと思います。
- 積極的に質問しましょう。英語で伝えられない、現地の方が言っていることがよくわからないと自分の英語に自信がなくなり消極的になってしまうかもしれませんが、それだと後から絶対に後悔します。普段では体験できないことをたくさん経験させていただけると思うので、一回一回の聞き取り調査を無駄にしないようにすることが大切です。
- 感謝の気持ちを忘れないということはとても大切だと思います。村の方々、現地のスタッフさん、通訳さんは貴重な時間を使って受講生の質問に答えてくださいます。毎回、笑顔でお礼を言うといいと思います。
- 他の受講生と仲を深めるのも大切だと思います。現地で調査していると、つらくなったりしんどくなったりするときがあるかもしれません。その時に話を聞いて一緒に頑張ってくれる仲間なので、たくさんコミュニケーションをとれるといいと思います。

【事前学習ではどのようなことを学んだ方が良いか】

- 文献をしっかり読み込むことは大切だと思います。読むだけではなく、読んでみて自分がどう感じたか、現地でどのようなことが聞きたいかなど、一回一回の授業の中で考えながら事前学習を進めることをおすすめします。

・ どの村にも絶対に聞く質問をいくつか用意した方が、後から分析するときにやりやすいと思います。
・ 決めつけをしないことは大切だと思います。「きっとこうなるはず」「こういう答えが返ってくるはず」という固定観念や勝手な前提を立てないように十分注意することが大切だと思います。
・ 文献で読んだ内容を鵜呑みにするのではなく、「文献ではこう書いてあったが、実際はどうか？」など、批判的に考えることが大切だと思います。
・ 砒素の問題をしっかり知っておくことは必須だと思います。
・ 砒素に関わらず、鉄や塩など飲み水に関わる問題は知っておいた方がいいと思います。
・ 砒素の問題だけではなく、山田先生が共有してくださるバングラデシュはどのような国か、どんな人たちがいるのか、などのバングラデシュ知識はしっかり聞いておくともっと楽しめると思います。
・ 一度日本のバングラデシュ料理屋さんに行ってみるといいと思います。自分に合うかどうかチェックしてから、カップラーメンなどのインスタント食品をどれだけ持っていくか決めるのがおすすめです。

【持ち物は何が必要だったか（持って行ったもので便利だったもの、反対に不要だったもの、持って行った方が良かったもの）】
・ お土産用の袋をすこし多めに持っていくといいと思います。私は必要だと思った分より少し多めにもっていきましたが、パンパンになりました。
・ コップやビスケットなど割れやすいものが多いので、プチプチの緩衝材などがあると安心だと思います。私は小さめのやつを一枚持っていきましたが包み切れず、いくつかのビスケットとコップが割れてしまいました。
・ カップラーメンはそんなに持っていかなくてよくて、2 つくらいあれば十分だと思います。
・ お菓子は和菓子中心にもっていくといいと思います。おせんべいやもなか、いもけんぴ、卵ボーロなどがすごく食べたくなりました。
・ 絶対に虫よけスプレーは多めに持っていったほうがいいと思います。
・ タオルは少し多めに持っていくといいと思います。
・ 飲み物は、現地にたくさん水を用意してくださっていたのでいらないと思います。
・ ドライヤーやアイロンは、部屋に一つあればいいので、同室の子と話し合ってどちらかが持っていくようにした方が荷物が少なくて済みます。
・ タブレットかパソコンは持って行った方がいいと思います。インタビューして聞きとった内容はその日のうちにデジタルでまとめ直すと、後から「あれなんだっけ」となることが防げると思います。一緒に聞き取りをしたメンバーと晩御飯後に集まって、聞き取れた内容をシェアしながら写真と一緒にまとめておくといいと思います（その日のうち

にやった方がいいと思います。似たような水源は多いので、どの水源の話かこんがらがってしまうからです)。

・ 酔い止めはたくさん持っていたほうがいいと思います。

海外フィールドワーク A を受講する皆さんへ

岩井佑季

【アドバイス】

- 基本的な質問は全ての村で聞く。リストを作っておいてもいいかも。質問できる時間が以外と短い。情報が揃っていたほうが調査後に考察しやすい。
- 訪問した水源の写真を撮っておく。訪問日や種類、村の様子の記録になる。
- 調査メモとは別に日記つけるのおすすめ。見つけたことや思ったことを何でも記録する。報告書を書くときに役に立った。
- 英語を聞き慣れておくと楽だと思う。先生や通訳の方が助けてくれるけれどそれでも大変。英語に疲れないように、聞くのを諦めないで頑張って！
- 調査の時は必ず水分を持っていく。蒸し暑いから熱中症に気をつけて。
- スーツケースができるだけ軽い状態で出発して。後先考えずにお土産を買うと大変。
- タカに両替するお金は 20,000 円あれば十分だと思う。想像以上に物価が安い。水はいろいろな場所で貰えるから大丈夫。

【持ち物・服装】

- 飛行機に乗る時の服装
  ブラトップに上着だけといった感じの服装は NG。保安検査の時に上着脱がされるかも。
- お茶
  飲み物が水と紅茶だけだとお茶が恋しくなる。
- 日本っぽいお菓子
  バングラデシュはクッキーが多い。お煎餅やあんこのお菓子が食べたくなった。
- 野菜系のカップスープ
  カレー味の肉、魚、炭水化物が続くから野菜が食べたくなった。
- アタック、どこでも袋でお洗たく
  一瞬で洗濯ができて楽。
- 虫除け＆殺虫剤
  携帯タイプ、スプレー、部屋に置くタイプ必須。気休めになる。

執筆者紹介（執筆順）2026 年 1 月現在

＊は編者

長谷部愛	（はせべ　あい）	名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科 3 年
松田咲優	（まつだ　さゆ）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 2 年
森川結子	（もりかわ　ゆいこ）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 2 年
石川陽葉莉	（いしかわ　ひより）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 1 年
岩井佑季	（いわい　ゆうき）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 1 年
＊山田翔太	（やまだ　しょうた）	名古屋市立大学大学院人間文化研究科講師

2025（令和 7）年度

名古屋市立大学　人文社会学部　国際文化学科

「海外フィールドワーク A（バングラデシュ）」

実習報告書

山田翔太編

2026 年 1 月